
遠い星の研究生

楠瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い星の研究生

【Nコード】

N6454C

【作者名】

楠瑞稀

【あらすじ】

眩い光に曝されて、目覚めるとそこは宇宙船の中だった。ブラッ
クユーモアSFもどき。

(前書き)

これは作者のHP『飛空図書館』に掲載されている作品と同一のも
のです。

そのとき俺はおそろしい程に腹が減っていた。

ここにはよく俺の大っ嫌いなあの生き物が出沒する。だからなるべく台所には近寄らないようにしていたのだが、あまりに空腹だったので文字通り背に腹が変えられなかった。なるべく目に付かないようにこそそと戸棚の中などを探っていたのだが、それがまさかこんなことになるうとは、俺は夢にも思っていなかった。

騒がしい周囲の音で目を覚ますと、俺が寝かされていたのは勝手知ったる自分の住みかではなかった。なにやらごちゃごちゃした機械やらディスプレイやらに囲まれた見知らぬ部屋。おいおい、ここはどこなんだよと、きよきよあたりを見回しているうちに、俺は自分が台所で突如眩しい光に曝されて意識を失ったことを思い出した。

「てっきり、あのとき死んだと思ったんだが」

「おお、どうやら目が覚めたようだね」

「うおっ」

俺は思わず叫んで仰け反ってしまった。なにしろ俺を取り囲んだのは、姿かたちは自分とよく似た（ただし所々が違う）生き物たち。しかも身長は倍以上もあるかという大きさだ。まるで自分が小さな子供にでもなってしまったかのような錯覚が起きる。

「無断でこんな所に連れてきてしまって申し訳なかったね。ここは我々の船の中だ」

「我々の、船？」

ふと窓の外に目をやると、そこには無数の星々と青い惑星。自分の見識不足なら恥ずかしい限りだが、地球にこんな場所はたぶんない。少なくとも俺は見たことが無かった。

「あ、あのさ、もし違ってたら悪いんだけどあんたらもしかして――

「、」

「ああ。君らが言うところの宇宙人というものだ」

こ、これが噂に聞くアブダクションとかいうやつかつ。俺はがくと顎を落とす。まさか勝手にインプラントとかされていないだろうな！

「我々はプストレマ星系ククⅡカートン星の研究生だ」

この謎の宇宙人たちは平然と自己紹介なんぞを始める。混乱の絶頂を極めている俺の都合などお構い無し。それでもまだ説明してくれるぶんだけありがたいのだろうが、

「我がククⅡカートン星は研究者の育成に力を入れており、特に星立大学の研究室には惑星ぐるみの協力体制を――、」

少なくとも非常にどうでもいい情報だな、これは。

「いや、あのさ。とりあえずはまず俺の質問に答えてくれないか！？」

「ふむ、なにかな」

どうにか有益な情報を得ようと無理やり話をねじ込むと、宇宙人どもは一転して聞く体勢に入った。どうやら聞く耳も持たないような輩とは違らしい。って、後ろの女メモ取る準備ばっちりだし。観察記録かよっ。

「ま、まあいいや。いいことにする！　まず、どうして俺とあんたらで言葉が通じるんだ？」

俺はククⅡカートン星とやらの言葉に精通してたりはしない。まさか俺たちと奴らの言葉が偶然にも同じだったとかはあるわけなし。

「ああ、そんなことか」

リーダーらしき相手がいかにもいい笑顔で答えた。

「我々と君らとは偶然にも近い発声器官を持っていたのでね、少々頭をいじらせてもらって我々の言語を習得してもらった」

……されてるよ！　なんかされているよ、怪しい手術！！

「安心してくれていいよ。後遺症などはないはずだ、たぶん」

「たぶんって!!」

何だか泣きたくなってきたが、それでも俺は質問を続ける氣力を奮い立たせる。

「じゃあなんで俺が選ばれたんだ？」

「ふむ、そのことなんだが――、」

やつはなにやら言い辛そうに口ごもる。

「我々の目的は他星系の生き物を数種類採集して帰ることだ」

「ま、まさか俺がその対象に!？」

「いや、さすがに自分たちとよく似ている生き物を実験動物にはできまいよ」

アハハと朗らかに笑って返す宇宙人。勝手に手術はしたくせに。

「それに君は平均値からは幾分か逸脱した個体みたいだからね。特殊な例を採取しても参考にはならないよ」

知能レベルも若干高いようだしね、と平然と述べる。

「だから君自身の心配はしなくていい」

「……俺は、どうやら規格外らしいもんでね」

無意識にひげをしごきながら、俺はなんとも不愉快な氣分になって吐き捨てた。

勝手に身体検査をされたこともそうだが、その言い方はちよつとむつとくる。見目かたちに変わりはないし仲間も気にしないでくれるが、それでも自分が周りと違うということは日ごろから意識せずにはいられない。しかしそれを見も知らぬ宇宙人なんぞにあらためて指摘されたくはなかった。

「班長」

宇宙人の仲間の一人がモニターを指し示す。俺の会話の相手をしてた奴はそれを見てはっとした。

「おお、どうやら氣分を害してしまったようだね。これは失敬」

「いや、単にこっちの氣持ちの問題だから――って、何そのバロメ

「ターっ。いつから計ってたんだよ！」

「参考にならないって今言ったばっかじゃん！！」

「まあせっかくの機会だから記念にね」

「何の記念だよっ！」

俺はなんだか落ち着かない気分でごしごしと手を擦る。だからソコ、記録とるなって！」

「話を戻すが、あんたらの目的はこの星の生き物を採取していくことなんだよな」

「対象はこの星だけではないんだが、確かにそれが目的だね。我々の専攻は宇宙生物学。なるべく多種多様の宇宙生命体を研究するのが目的だ」

「そのことだけど、悪いが俺の同類を連れて行かれるのは困るんだ」

極めて情の薄い俺は、友達や知り合いが無事なら大抵のことはどうでもいい。だがさすがに同胞が宇宙人に攫われるのを黙ってみているというのは寝覚めが悪かった。

「いや、それは大丈夫だ。言っただろう。他星人でも自分たちと似た生き物を採取したりはしないって」

「ああ、そういえばそうだったな」

「だから採取するとしたらまったく異なる形体の生き物にしたいんだが、この惑星の規模からすると予定採取数がちよっと問題でな」

「どれくらい必要なんだ」

「ざっと六十億個体」

俺は眉を顰めた。確かにその数は決して少ないとは言えない。

「我々の目的は飽くまで研究であって、その星の生態バランスを崩すことは本意では無い。だから君に採取していくのに都合のいい生き物を教えてもらおうと思ったんだ」

「それが俺を連れてきた目的か」

しかしいきなりそんなことを言われても判断つかないぞ。六十億匹も連れて行かれて問題無い動物なんて――。

けれどそこで俺はぴんと来た。いるじゃないか、まさにちょうどいい生き物が。

「ああ、それならお勧めの生き物がいるぞ」

「ほお」

遠い星から来た研究生は興味深く目を輝かせる。

「台所でよく見かける奴らなんだけどな、俺も常日頃から疎ましく思っていたから好都合だ」

「なるほど。しかし個体数は充分かい？」

「もちろん。地球上に限なくいるみたいだからな。増えすぎて困るくらいだ」

「いなくても星の生態系には問題はないかい？」

「俺は学者じゃないからちゃんとしたことは言えないけど、大丈夫だろう。住んでる奴のことを考えずあちこちに巣を構えるし、新しい病気も蔓延らせたりする。あいつらが増え始めてからは環境が悪くなる一方だ。害にしかないよ」

「そうか。ならば安心だな」

奴らはすっかり乗り気なようで、仲間たちと採集の算段について話し合っている。一方俺は、突如降って湧いた僥倖に静かな興奮を覚えていた。

俺が腹を空かせて台所にいたのも、並外れた高い知能を持って生まれたのも、今日このために仕組まれた運命だったといっても過言では無いだろう。

これで俺の仲間たちも安心して暮らせるようになるかも知れない。スリッパで叩き潰されて友や知己を失うのはもうたくさんだ。

「そういえば、その生き物たちはなんて名前かい？」

「ああ、あいつらはホモⅡサピエンスって種族さ」

「なるほど」

光沢を持つ黒い甲殻に星明りを反射させ俺はほくそ笑む。

研究生たちはひげ——長い触覚を揺らしながら、薄翅を震わせて行う会話を続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6454c/>

遠い星の研究生

2011年8月16日03時25分発行